

おとうさんのかたぐるま (犬の話)

生まれて半世紀が過ぎた。その間に身近に5頭の犬がいた。人生の約半分に当たる25年間で犬のいる生活だ。初めての犬は記録に残っているだけで記憶にはほとんどない。実際に一緒に生活していたのは私の生後4ヶ月間。京阪間にあるお寺の離れに両親が住んでおり、そのお寺にもらわれてきた犬だった。黒い中型犬で足が白色。当時嫌われる色合いだったらしく、お寺で引き取ることになっただろう。ところが飼ってみれば名犬で、お寺の信者さんには絶対に吼えることがなく、それ以外の怪しい人には猛犬のように吼えていたらしい。その犬に面倒をみてもらったことがあると両親から何度も聞かされた。ハイハイができる頃、お寺の用事を手伝っていた両親はござの上に私を乗せ「ござから出ないようにみておいてね」と犬に頼むと、這い出でそうなる私を優しく噛み、ござの上に引き戻していたそうだ。乳児の私はその犬の鼻や耳など、犬の嫌がる場所を掴んでいたらしいが、その犬はじっと我慢をしていたと聞かされた。小学校4年生頃にその犬はお寺の裏の山に姿を消した。恐らく自分の死に様を見られなくなかったのだらうと和尚さんが話していた。気骨のある犬だったと思う。二匹目は近所に現れた雑種。いくら躡をしても全く身に付かない放浪の野良犬だったようだ。幼稚園時代に近くに来てモソモソしていたのを家に引き取って飼い始めた。当時住んでいた長屋から団地に移る時、保健所の世話になっただろう。子供だった自分はその真相を知らない。団地住まいから小さいながらも一戸建ての住宅に移った頃、犬以上に面白い体験が目白押しで、犬を飼うことなど考えもつかなかった。そして高校2年生の時、獣医の紹介で雑種のオス犬を一匹貰い受けた。獣医から連れて帰るときに感じた、片手に乗るほどの小さな命の暖かさを今も手の平が覚えている。それまで飼った犬達同様、その犬も雑種らしい雑種だった。ところが母親の胎内からお土産を持って生まれてきた犬だったようだ。我が家で生活して暫くすると、糞の中に小さな回虫が見つかることが何度かあった。当時、ボーイスカウト活動でキャンプ生活を楽しみとしていた私は、その小さな体の弱り果てた犬を、5~6キロ離れた獣医まで、大きなリックサックに詰め込み、自転車で何度も通うようになった。リックサックの縛り口から顔だけを出して、気弱な表情の犬を背負って自転車を漕いでいる姿はとても滑稽に見えたと思うが、犬の命がかかっていると思うと、ペダルに込める足の力は強くなっていたような気がする。私の父は戦前生まれのやや体の弱い、昭和の父親だった。しかし子犬を育てるのがとても上手で、何匹も父親に脱脂粉乳（もう死語かもしれないが）を哺乳瓶で飲ませてもらい、優しく背中を叩いてもらい、人間の赤ん坊のようにゲップをさせてもらい、そして腕の中で子守唄を聞かせ寝かせつけられていた。高校時代にももらった犬も同じように育てられ、すぐに家族の一員となっていた。散歩好きで、リードを放してやると、いつまでも家の前を走っていた。まだ幼犬だったころ、近くの畑に散歩に出掛けた時、野犬の襲撃にあったことがある。当時、まだまだ野犬がのさばり、ごみを荒らしたり、人や小動物を襲ったりしていた。当時の河内平野は大阪の衛星都市でありながらも、まだまだ昭和の臭いの残る街だった。私はその子犬を抱きかかえ、死に物狂いで野犬を蹴り飛ばした。そしてその頭領と思われる一回り大きな犬を、偶然にも蹴り飛ばしたとき、野犬たちは吼えながら逃げ去っていった。私の子犬は野犬たちが走り去った後も、その臭いに怯え、私の腕の中で震えていた。それから以前にも増して、その犬との絆が強くなったように思えた。私が深夜に戻ってきても、庭のフェンスの間から鼻先を出して、甘えた声で迎えてくれることが当たり前になっていた。大学時代、京都に居座り家に戻らない日が続き、たまたま家に戻ると、私の夕食はなく、庭の犬の餌のなかにそっくりとそれが収まっていることも何度かあった。それでも楽しい相方のように過ごしていた。そして大学生のある日、灼熱の太陽が大阪を干からびさせようと照っていた夏のある日、アルバイトから戻って来た私を待っていたのは、段ボール箱に包まれた愛犬の遺体だった。早朝に家を出るとき、少し元気がないかなと思ったが、前夜の散歩で畑を疾走する姿は元気そのものだったのだが、夕刻に家の玄関で息絶えていたと聞かされた。犬が死んだというだけなのに、これほど涙が出たことがなかった。「お前、なんでやねん、今朝、元気やったやん」と何度も声をかけたのだが、二度と再びその姿は戻らなかった。考えてみれば4頭目の犬で始めて別れを体験したのだから、ショックが大きかったがの当たり前だったと思う。その悲しみの中、もう二度と犬を飼うことはできないと思ったのは両親だけではなかった。